

研究結果報告書

多言語・多文化共生社会の視点から見た発話行為の日中対照研究: 「謝り」と「弁明」を中心として

所属：上海電力大学

役職：教授

氏名：文 鐘蓮

日本と中国は文化、言語、歴史などといった様々な面で共通しているところが多くあるが、異なった地理的環境及びその国独特の政治的体制や文化的背景のもとで、各自独特の言語文化を作り上げてきたため、日中両言語の発話行為には共通点もあれば、相違点も多くある。日本語には敬語、言いさし表現、言いよどみ、中途終了文、ため口のような日本語独特の相手や場面に適応できる便利な言語の仕組みがあるが、中国語には日本語のような言語の仕組みがないため、両言語の発話行為をめぐる言語表現の丁寧さ（Politeness）の特徴及び基準は異なるはずである。

本研究では、両国の大学生を被験者として日本人母語話者（以下、NNS と略称）と中国人母語話者（以下、CCS と略称）における発話行為の対照研究を通じて、言語の理解と運用能力を向上させるための理論と方法、発話行為に関連する諸問題を総合的に研究し、国際化社会における日中コミュニケーション活動の諸相を分析、考察すると共に、文化の動態と多元性、文化間接触といった観点を重視し、多言語共生の可能性とその実現性を探求した結果、以下のような結論がみられた。

日中両言語ともにその言語行動を行う際の様々な条件の制約を受けているが、日本人母語話者の「謝り」と「弁明」の表現は相手の社会的地位、親疎関係及び場面の緊急度とは関係なく、日常の言語生活の中でよく現れ、激しい変化はみられない。しかし、中国人母語話者の場合は日本人とは異なって、両者間の人間関係が危険性を招くことのあり得る場合や相手の社会的地位（上下関係）、心理的要素（親疎関係）、及び場面における物事の利益・負担度と強く関わり合っており、相手の社会的地位が高い場合や疎の関係、また場面での緊急度が高いほど「謝り」や「弁明」の出現率が高くなり、それとは異なる場面においては「謝り」や「弁明」の使用頻度が低くなるのである。

本研究で得られた結果が今後の中日異文化摩擦を減少させ、相互の異文化理解促進、且つ多言語・多文化共生世界を作り上げるのに役立てられたらと願っている。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

題名:「多言語共生時代における中日言語交流の発展と人材養成に関する研究」

発表者:文 鐘蓮・関 豪

掲載誌:『青春歲月』、2020年12月発表(採用済み)

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)

題名:「多言語共生時代における中日言語交流の発展と人材養成に関する研究」

発表者:文 鐘蓮・関 豪

掲載誌:『青春歲月』、2020年12月発表(採用済み)